資料６

新潟市･巻町の沿革

新　潟　市　の　沿　革

新潟市で人が生活を始めたのは，4，000～5，000年前の縄文時代からと考えられています。

人々は砂丘に集落を作り，生活していたと思われます。

市域に関する地名が初めて登場するのは，日本書紀に記録されている「渟足の柵」が最初で，「新潟」という地名は，戦国時代の永禄7（1564）年，京都醍醐寺の僧侶の手控え帳で「ニイカタ」として初めて登場しています。

新潟市のまちづくりは，長岡藩主堀直寄が江戸時代の元和3（1617）年に行った町建てが基本となっており，その後の移転により，現在の古町通，本町通，上大川前通など，本市中心部の町並みが作られました。

また，越後平野の村々で生産された米や品物は信濃川や阿賀野川，加治川を通して新潟湊に集められ，新潟町の商人によって江戸をはじめ北海道や九州など全国へ積み出されていました。湊には商人だけでなく多くの文人・学者などが訪れ，新潟湊は活気に満ちていました。

幕末の天保14（1843）年，新潟町は天領となり，初代新潟奉行として赴任した川村修就は土地の開発，物価の安定，海防，風俗の改善など様々な施策を行いました。特に砂防については，以前から行われていた松の植栽を積極的に進め，26，000本に及ぶ苗木を植え付けています。

新潟町は，幕末・戊辰の激動を経て，アメリカ・イギリスなど5か国との修好通商条約による開港場の一つに指定され，世界に開かれた港町として明治時代を迎えました。

明治5年新潟県令として赴任した楠本正隆は，堀の浄化や道路の改良，区画整理，白山公園の建設など新潟町の近代化を推進しました。

明治22年，市制が施行され「新潟市」が誕生しましたが，当時の人口は43，911人，面積は12．22㎢でした。その後，日清・日露戦争やそれに続く産業革命によって，電気・ガスの供給や電話の設置，鉄道の開業，商工業の振興など近代化が急速に進んでいきました。

大正3年に沼垂町と合併した新潟市は，人口91，604人の都市となり，竜が島・山の下地区で臨港，中央，北の各埠頭が建設され，工場の立地が増加するとともに，大正11年にはバスの営業も開始されました。

また，医科大学や高等学校などの教育施設が設置され，図書館や映画館が開館するなど，学問・芸術も普及していきました。

そして戦後，新しい憲法のもとに政治や教育の民主化が進められ，市議会では初の女性議員が誕生したのをはじめ，6・3・3制による新たな学制が施行され，昭和24年には新潟大学が誕生しました。また，農業では農地改革の実施や栗ノ木排水機場の完成に対応した，大規模な土地改良が行われました。

昭和30年代に入ると，工業化が進み，電化製品が普及するなど，経済の高度成長時代となり，本市でも化学工業を中心に経済発展が始まりました。

しかし，昭和30年の新潟大火や昭和31年ごろから急速に進んだ地盤沈下と海岸決壊，そして昭和39年の新潟国体直後に起きた新潟地震など昭和30年代は大規模な災害が相次いだ時代でもありました。

昭和40年代は新潟地震の復興から始まり，都市基盤の整備や住宅団地の造成，大型スーパーの進出などが進み，経済の安定成長に伴い消費の拡大が続きました。

昭和44年には東港が開港，昭和47年には関屋分水路が通水し，昭和48年には新潟とハバロフスクを結ぶ空路が開設され，新潟バイパス，亀田バイパスが開通するとともに人口も40万人を突破しました。

しかし，その一方では，急激な都市化による，生活環境の悪化や公害の発生などの環境問題が大きくクローズアップされた時代でもありました。

昭和50年代からは，交通体系の整備や国際化の進展，下水道に代表される生活環境の改善などが一層進んでいます。

交通体系では，昭和57年に大宮まで開業した上越新幹線が平成3年に東京駅乗り入れ，昭和60年には関越自動車道，昭和63年には北陸自動車道，さらに平成9年には磐越自動車道が全線開通するなど新潟市は交通拠点としての重要性を一層増しています。

国際交流では，昭和56年には国際友好会館を設置し，平成2年には(財)新潟市国際交流協会が設立されるなど，国際交流の基盤整備を進めるとともに，ソウル，ハバロフスク，ウラジオストク，ハルビン，グァムなどとの国際定期航空路も開設され，市民レベルでの国際交流も活発になっています。

生活環境では，地震により壊滅的な被害を受けた下水道の普及率が平成8年には50％を超え現在では65％に達したのをはじめ，地域の市民活動を支える各種コミュニティ施設やスポーツ施設などの整備が着実に進んでいます。また，来るべき高齢社会に向けた住民の参加による新たな在宅福祉サービスの供給主体として，平成5年に(財)新潟市福祉公社が設立されました。

平成6年には新潟国際情報大学をはじめ，新潟青陵大学や新潟医療福祉大学が開学し，高等教育機関の整備も進んでいます。

また，平成8年4月には中核市の指定を受け，さらに，21世紀冒頭の平成13年1月1日には隣接する西蒲原郡黒埼町と合併し，「新しい新潟市」としてその第1歩を踏み出し，翌平成14年6月にはアジアで初めてのワールドカップサッカー大会を日韓の開催地のひとつとして開催しました。

現在も新潟市は「市民ひとり一人が光り輝き，人間として尊重される市民主体都市の創造」を基本理念として，市民生活を取り巻く社会環境の変化に対応したまちづくりを推進しています。

巻　町　の　沿　革

巻町の歴史は古く、県内最古の古墳である山谷古墳をはじめ数多くの遺跡が丘陵地帯から発見されています。なかでも古墳時代前期に造営された菖蒲塚古墳は、前方後円墳として著名で優秀な鏡をもつなど、大和政権と結びついた地方首長の墓と考えられています。

巻の地名については定かではありませんが、古くは槙・真木と書かれ、アイヌ語のマク（山手・奥・後ろ）や牧（牧場）の当て字、さらには信濃川の洪水のうず「巻」く地などが地名の由来とされています。

中心地の巻は、近世には長岡藩巻組の中心地として同藩の代官所が置かれ、近傍の村々を支配していました。また角田山麓の三根山（現峰岡）周辺の村々は、牧野家三根山領となり、幕末には三根山藩領として統治され明治を迎えました。

明治12年、郡区町村編成法により西蒲原郡巻村となり郡役所が置かれ、明治22年町村制施行により13の村が成立しました。

明治24年には巻村が町制を施行し、さらに明治34年に施行された町村合併で6か町村となりました。

昭和30年1月1日、町村合併促進法により巻町・漆山村・峰岡村・松野尾村・角田村・浦浜村の1町5村が合併，新生「巻町」が発足し、その後、同年7月10日、西川町の一部（葉萱場・中郷屋・割前・羽田・東汰上）を、昭和35年4月1日には岩室村の一部（安尻・下和納）を編入し、現在の巻町となりました。

昭和30年代には現在の巻町立病院の前身である巻国民健康保険直営町立病院が地域の中核を担う病院として開院、鎧潟干拓国営事業の起工、新潟国体のホッケー競技会場誘致、県内最初のセンター方式による学校給食センター完工、県立巻工業高等学校、興農館高等学校が開校し巻高等学校、巻農業高等学校と併せ4校の県立高校を有するなど西蒲原郡の政治、経済、教育、文化の中心地としての態様の土台が築き上げられました。

昭和40年代は、シーサイドライン（現在のR402）オープン、R116の開通、北陸高速自動車道の起工、新巻駅舎の完成など現在の高速交通体系の骨組みが作られ、農業面では角田山ろくで柿団地が造成、また新潟県巻総合庁舎をはじめとする県養鶏試験場、県青少年教育センター、税務署、職業安定所などの国県の出先機関庁舎が整備されました。

また、以後巻町を混乱に陥れた原子力発電所問題が浮上してきたのもこの年代でした。

昭和50年代には小中学校の再編が進み、巻北小学校、巻南小学校の開校、巻東中学校、巻西中学校の同時開校のほか新潟県農業大学校の開校など教育施設の整備がさらに進められ、巻町文化会館、公民館の開館、入徳館野外研修場、城山野球場の建設など教育、文化、スポーツ行政の振興が図られました。

昭和61年には新浄水場が完成し全町に上水道が行き渡るようになりライフラインの整備が進められました。昭和62年には巻・潟東IC周辺に漆山企業団地の造成がはじまり、その企業進出により地域経済活性化に寄与しています。今後ますます進展が予想される高度情報化、高速交通時代の当町の玄関口として、IC周辺の発展が見込まれる地域となっております。

また観光面でも従来から佐渡弥彦国定公園の核として風光明媚な海・角田山を有する当地域に、新たに平成5年にオープンした温泉保養施設「じょんのび館」は日帰り温泉施設の先駆けとして町内外から年間26万人超を集客するなど魅力あふれる広域観光エリアの一員として、また地元の雇用創出にも大きく貢献しています。

平成8年には町を二分して紛争が繰り広げられてきた「原子力発電所建設の可否を問う住民投票」が全国で初めて実施され、住民意志の選択により建設ノーの結論が出されました。

その後、町有地売却、訴訟問題と紆余曲折を経て平成15年12月の最高裁判決を受け、電力会社による原子力発電所建設計画の撤回表明により30有余年続いた同問題は事実上終止符が打たれました。

この間、巻町は昭和47年から3次にわたる巻町総合計画を策定し、魅力ある地域づくりを目指し、生活関連社会資本の整備や社会福祉・保健医療・行政等の充実などを推進してきました。現在も平成10年に策定した第4次巻町総合計画に掲げる「豊かな自然、あふれる文化、活力ある産業で一人ひとりが輝く巻町」を将来像に掲げ町づくりを推進しています。

合　併　史

	新潟市	巻　町
明治22年4月1日	関屋村古新田を合併し、市制施行（新潟市）	巻村、福木岡村、竹野町村、仁箇村、稲島村、松野尾村、越前浜村、角田浜村、木山村、漆山村、潟南村、馬堀村、佐渡山村、五ヶ浜村、角海浜村で村制施行
明治24年4月10日		巻村が巻町として町制施行
明治34年11月1日		福木岡村、竹野町村、仁箇村、稲島村が合併し、峰岡村となる／越前浜村、角田浜村、木山村の一部が合併し、角田村となる／漆山村、潟南村、馬堀村、佐渡山村の一部が合併し、漆山村となる／五ヶ浜村と角海浜村が合併し、浦浜村となる
大正3年4月1日	中蒲原郡沼垂町を編入合併	
昭和18年6月1日	中蒲原郡大形村を編入合併	
昭和18年12月8日	中蒲原郡石山村、鳥屋野村を編入合併	
昭和29年4月5日	北蒲原郡松ヶ崎浜村を編入合併	
昭和29年11月1日	北蒲原郡南浜村、濁川村、西蒲原郡坂井輪村を編入合併	
昭和30年1月1日		巻町、峰岡村、松野尾村、角田村、漆山村、浦浜村が合併し、巻町となる
昭和32年5月3日	中蒲原郡大江山村、曽野木村、両川村を編入合併	
昭和35年1月11日	西蒲原郡内野町を編入合併	
昭和36年6月1日	西蒲原郡中野小屋村、赤塚村を編入合併	
平成13年1月1日	西蒲原郡黒埼町を編入合併	